

小森 惠雲 展 ギャラリートーク

～私の道～

平成28年4月24日(日)

エイブル2階交流プラザ

おはようございます。私はこういうところでお話するような立場ではないのですが、機会をいただいて、よい経験かと思いオーケーしたわけです。今日の話がどうなるか、わかりません。あっち飛び、こっち飛びするかもしれませんが、よろしくをお願いします。

私は、父の跡を継いで惠雲という雅号を名乗っていますが、雅号は2代目で、仕事が4代目ということです。

私は5人兄弟のいちばん下なんですね。子どもの頃は、兄ちゃん姉ちゃんと裏山に行って遊んでいました。薬師さんという山があったのですが、この時の経験が今に生きています。高校生の頃は工業関係の仕事に就こうと思っていました。

現在の店舗に大きなダルマがあるんですけど、高校2年生の時に、親父の手を借りながら彫らせてもらったんですね。その時、作品は残るんだと一応気づきはしたんですね。ただ、まだ跡を継ぐ気は全くありませんでした。

しかし、3年生になって、俺このまま卒業していいのかな、と思っていた時に、ある先生が「日本人ならば、日光東照宮か富士山は1回見とけよ」と言われたわけです。それを聞いて、俺は富士山に登ろう、たった1人でも登ろうと決めたわけです。初めて夜行列車に乗って、富士山の頂上に立った時、雲の上に出る御来光の美しさに感動しました。そして雲が切れた時に下界が見えるのですけれど、ものすごく小さく見えるんですね。自分の考えはこんなに小さかったのかと、富士山に登って知ったんです。

それから、この時を起点に、自分を振り返った時「大きなダルマを作った、作品が残ると気づかせてもらった、父の跡を継いでみるか」と、帰りの列車の中で思ったわけです。それで、帰ってから「おい、してもよかばってんが、どげんかにゃ。」と親父に相談したら「したかぎせらい。そいだけ、努力の必要ばん。」と言われて始めたわけですね。親父が3代目として続けてきたことを継ぐ、と決めたわけです。

そして、親父の弟子に就いたわけですが、これで生活できるだろうかという不安が生まれるわけです。不安があるというのは、未熟という証拠なんですね。しかし、そこで思い切った。このままでは親父に甘えてしまうということで、独立して「杉彫まきちよう」という店を始めたわけです。なんで「杉彫」か。当時、作品はほとんど屋久島杉を使って彫っていたわけです。地元の杉なんかも使って彫っていたわけです。今は、屋久島杉は天然記念物でなかなか手に入らないし、高価だし、今はクスノキなどになっていますが、「杉彫」の発祥は屋久島杉を使っていたということですね。

私の仕事は、社寺彫刻と美術工芸に分かれます。社寺彫刻というのは、神社仏閣の彫刻、入口に獅子のような感じ、あるいは唐草模様など、お寺に行けばいろいろありますよね。大きな材料を運ぶのは大変で



すから、3代目の親父までは出張して行って現地で仕事をしていたわけです。私の代になったら、建築技術が進んで彫刻が間に合わなくなった。そのため、今は補修を中心に仕事をしています。

美術工芸になると、浮立面というのが入ってきます。それから装飾用ですね。これは、民・工芸です。浮立面も民・工芸に入るかもわからんけれど、技術的には工芸なんです。現在は、県木のクスノキがあるがゆえに、いろんな仕事ができます。クスノキは、乾けばものすごく硬いです。乾いていない時には仕事はしやすいですね。しかし、板状態にすると曲がってしまいます。ですから、昔から建築材には使っていなかったんですね。今は、お寺でも柱まで使うようになってはいますが、曲がる癖が強い。

クスノキはどういう香りがするか知っていますか？ここに少し持ってきたので、一つずつと匂いをかいてみませんか。香木として削って市販しているところもありますが、このクスノキで、ひな人形や子供の日の兜かぶとも作ります。

私は木の良さというのを知ってもらいたいです、皆さんにね。匂いをかけば癒されるということも一つなんだろうけど、もう一つ取り組んでいるのが「やすらぎ人形」作りです。木は触れば癒されるんですよ。パワースポットとして、木を抱っこしたりするところもあるでしょう。触るということに人間は癒されるのです。だから、頭を手でなでてもらうように、という気持ちで作っています。これまでの人生経験の中でいろんなことがあったから、これができるわけです。

また、木彫教室で言っていることは「やる木・こん木・ほる木」の3木があれば、作品ができるということ。だれでも趣味としてやろうと意気込みはあるけれど、なかなか思うようにならなくて途中でやめてしまうんです。とにかく、3木を大事にしてやっていけば必ず作品は生まれるよと言っています。

そして、作品作りにはアイデア。人まねというのは簡単にできるけれども、まねるというのには心が入らないから、良い作品ができないんですね。ましてや公募展に出すような作品ということになれば、絶対まねはできません。自分でこれはいいなと思っても、普通の仏像を作っているのは受賞はできないですね。やっぱり、自分が想像する、発想というのがいちばん大事ですね。ということから、常に絵の勉強もしていないといけない。私が今でも反省しているのは、絵の勉強が足りなかったということです。

浮立面の話に入りますが、バブルの最盛期には、制作には「1年待ってください」「2年待ってください」というときがあったのですよ。しかし、バブルがはじけてからは、そういう贈答用がなくなった。それとともに、面浮立がすたれてしまうんじゃないかならうかという不安があったわけです。ある時、佐賀玉屋で作品展をしていた時に、面を見たお客さんから「こい、何ですか？」と言われたわけです。「佐賀の面浮立です。」「佐賀の面浮立で知らんとですか？見たことなかですか？」「知らん。」と。県外からの方かと思ったら、佐賀の人でした。唐津の山車やなまはげは知っているのに、鹿島の面浮立は知らない。

これじゃいかなあ、報道関係に触れるようにしたいと思いました。そのためにはどうすればいいかと考え、小学校などで講義をし、面作りを指導するということを始めました。今、小学校で運動会の時に使う浮立面を作っています。実際の面のように厚いのは振り回すのに大変なので、また自分の顔も見せな



くてはいけないので、紙で作っています。こういう状況を作って行けば、取材にも来てもらえるし、子どもたちも喜ぶだろうということでやっています。木でいろいろ作ったりもしています。もちろん、秋になればお祭りの面浮立の報道がされますけど、地元から面浮立の本当の良さを知っていかなくちゃいけないと思います。

ところで、浮立面のメスとオスの違いはわかりますか。この面は明治

時代のもので。明治という確証はないのですが、大正生まれの人が言われるに「じいさんが使いよった」と。ということは、どっちにしても明治のことだろうという推測です。(別の面を指して) もちろんこれもそういうことです。では、オスとメスの違いはどこでしょう？メスは口が開いているんですよ。女はよく喋るから、口が開いていると思います。泣く時も口を開けて泣く。オスの場合は「ン」って口を結んで我慢する。男泣きしない。そういうイメージで覚えてもらったらわかります。

私の目から見て、よく彫ってあるという面は、まず左右対称になっている面です。今から、皆さんが面を見る時に、第一に、面が角ばっているのか、全体的につるっと丸くなっているのか見る。そして、左右が対称になっているのか。パッと見ては分からないので、どこを見るか。逆さにしてみるとわかります。または、横にしてみるとわかります。右のものを左に移すというのはものすごく技術がいります。だから、そのバランスをとるのが難しいんですよね。そのままマネするというのが難しいということです。創作的なもの、公募展に出すようなものは自分の発想でやらなくちゃいかん、人のマネをしてはいけないというのがありますが、この面に関しては、そのまま写すということが必要かと思います。



面浮立については、歴史的なことはご存知かもしれませんが、いろんな矛盾点があるわけですね。歴史的に、100年、200年違う場合があるわけですね。戦争がらみの話がほとんどですが、第一、面をつけて戦争できる？邪魔になりますよね。偉い先生が調べたら、面をつけて戦争をしたことはないそうです。シャグマだけをつけて戦ったという記録が古文書の中にあるんですね。シャグマ隊としてね。ヤクの毛を赤く染めて槍の先とか兜の上につけて、魔除けにしていたらしいのです。そして、兜をかぶった時に、顔にマスクのようなのをしてあるじゃないですか。それと浮立面とがなんとなく似ているのです。だから、そういうイメージが面と結びついたんじゃないかなと思うのが、今のところの考えのようですね。

これが本当の龍宿浦の古い面です。龍宿浦の言い伝えでは、山伏がその地域にお世話になったからと言って彫ったということです。そして当時は、この面を使って、悪魔祓いのようなことをしていたらしいです。いつの間にか面浮立と抱き合わせて踊るようになったということです。

また、年末の宮中行事に「追儺」というのがあるそうですね。音成の面が、その時の面に似ているらしいんですよ。やっぱり、それも山伏が農民に作ってプレゼントしたと。それを諫早の方から伝わってきた時に自然に取り入れて、だんだん鹿島地区が中心となってきて、武雄とか小城とか芦刈とか、その辺まで広がっています。それから西の方では多久、武雄までつながっています。鹿島だけでも25か所ありますもんね。ですから、現在の計画として、地域の面を集めて展示したいなと思っています。そういう時に、面にはこういう歴史があるなと、勉強していただければありがたいなと思います。地域によっては、同じブロックでありながら、面の形が3回くらい変わったところがあるんですよ。

なんで鬼というのが生まれたのか。鬼の発祥というのは「隠形(オンギョウ)」が「オン」になり「オニ」になった。ということは、見えないものが隠れているということですね。隠れて、自分に都合が悪いことがオニなんです。オニを描いてみてください。オニには角と牙を描くじゃないですか。自分があん畜生、こん畜生と思っていたらこれが伸びるわけですよ。小学校で子ども達から「オニは人間ですか？何ですか？」と聞かれたとき、一瞬どう説明していいか分からなかったわけです。「確かにオニはオニだけれど、人間だよ。人間のいろんな欲望がオニだよ。人の悪口ばかり言っていると牙が伸びてくる。だから、

日常生活の中で欲望や悪口を減らしていこう」と答えました。

次に、実際に、私の作品で説明していきたいと思います。

シャボン玉とか、腕相撲しているところとか、あるいは、ばあちゃんと「ぬっかぁー（暑い）」と過ごしているところとか、いろいろ作品があったと思いますけれど、幸せな世界の中での課題がそこに生まれているということですね。彫る難しさばかりではないわけです。確かに、私のこだわりで1本で彫っていますけれども、例えば、腕相撲をしているのも、縁台から1本の木なんですね。確かに、道具が入っていないから、難しくて手間がかかります。技術も必要だけれど、やっぱり家族団らんの世界を表わしたいなというのが、あのような作品になったわけです。【ぬっかぁー】という題の、ばあちゃんを一生懸命うちわ



であおいでいる作品は、やっぱり孫が「ばあちゃん」と慕っている気持ち、今は核家族になって、そういう場所がないでしょうけれども、家庭の団らんというものをそこに取り入れていったということですね。それから、【シャボン玉】というのがありますが、兄弟仲良くシャボン玉で遊んでいる。泡の一つ一つ、あれは繋いでいないのですよ。全部1本の木です。シャボン玉の一つ一つが大きな輪になっていくようにという気持ちで、あれも作っているわけです。



それから、県展なんかで入賞入選というのは、2メートルくらいの大きな作品も2、3体ありました。それらの作品で、うちの奥さんに「外に出しとったら邪魔になる。」と言われていたので、人に差し上げたのもあります。写真も残ってないですね。それだけ私が気のなかつたということでしょうね。私も、写真くらい撮っておけば説明もしやすかつたんでしょうけれども、まさかこういうところで話す機会をいただくとは思わかつたので。

仏像なんかも、お不動様なんかがありますけれども、それぞれ意味があるわけですね。ただ漠然と飾り用に作るのではなく、お不動様は真言密教関係で、誕生院さん関係なんかは、目が二つ開かれていますね。そういうのを目指すんです。だいたい、片一方結んで、片一方は牙も互い違いになっているとか、そういう状況なんですけれども。あれは、両眼開いています。両眼開いているということは、これを守るには、たいへん修行した和尚さんでないと守っていけないということなんですね。ただ飾り用に聖徳太子を彫ろうとか、恵比寿大黒を彫ろうとか、庶民的なそういう仏さんもありますけれども、最終的にはやっぱり自分が幸せになりたいという願いなんですよ。自分が彫るときには、自分が経験してきたことを振り返って、幸せになるようにという気持ちで彫っているわけです。幸せだ、不幸だというのは、自分の心次第なんですね。ある人から見れば、あんた幸せねと。自分は不幸だと思っていたけれど、あんた幸せね、と言われる。考え方のレベルが違うわけです。一般的にいう「苦労」を知っておけば、幸せがわかるから、お話もできるじゃないですか。だから、いろんなことを経験したほうがいいですよ。

今回のテーマに「木は語る」という名称をつけているのは、初めに「木からパワーをもらえる」ということを言ったんですけど、木は60センチの高さに育てば、そこに魂が入ると言われています。ですから、木そのものをむやみに切るというのではなく、それなりに気持ちを込めて切らないと申し訳ないと思います。

私たちが浮立面を彫るのに、クスノキにしたら、小さくても直径60センチ以上ないとダメなんです

よ。なぜかという、木の中心というのが、芯があれば必ず割れますから、その横っちょで四角をとらないといけなわけですね。ということは、計算したら小さくて60センチ。だから、かなり大きな木を使っているということになります。ですから、そういう木を我々に提供してもらっている、提供してもらっている側として作る、そのためには人を癒していけるような作品作りをしていかないとはいけません。

それからまた、面の話に戻りますが、面浮立を踊るときの衣装の違いは分かりますか。大きく分ければ二つあるんですよ。黒い^{さむえ}作務衣姿の衣装と、^{はっぴ}法被姿の衣装ですね。本来は作務衣姿の作業着が本当だろうと思うんですけど。これは浅浦の衣装ですけども、法被にトレパン姿ですね。こういう衣装になると、踊りの要素、人を楽しませるという要素になってくるわけですね。しかし、模様を見ると背中のはうには錨とか縄とかを描いてあるわけですよ。ということは、朝鮮出兵に関わる船の上で、余興的に踊ったのが、そこに関わってきたかなという推測もできるわけですね。音成みたいに真っ黒だったら、ほとんど作業着で、何の飾りっ気もないです。これが音成系の真っ黒衣装ですね。そして、母ヶ浦の面は、色が何種類かあるんですよ。レンガ色だったり緑だったり、白っぽい感じとかクリーム色とか、色によって位が違うわけですよ。でも、いちばん偉い人は、今まで踊ってきた先輩たちですね。これから面浮立を見るときには、そのようなことを感じてほしいですね。

面浮立の起源と言われている太良地区でも、10か所くらい踊りがあるんですよ。鹿島だけで今、25か所ありますが、踊りとしては太良の方から伝わってきました。しかし、音色などは全部違うんですね。同じ音に聞こえますが、全部違うんです。各浮立が各地域にあるからですね。ですから、その踊りと、音色がどのように合わさって現代の形になったのかという経緯はわからないですけど。朝鮮出兵で言えば、船上で面をつけて踊ったとか、あるいは朝鮮の踊りをまねたとか、いろいろあるわけですよ。

最終的に結びつくのは、何十人でも一緒に踊る団体芸能というのは珍しいですよ。盆踊りとは、また違うからですね。こういう仮面をつけて何十人も踊る地域は、全国どこにもないです。4~5人太鼓をつけて舞うというのは、能登半島辺りにありますけれど、何十人つけて踊る地域はないですよ。これは、誇りに思っていると思います。今日来てもらった方には、面浮立という伝統を大事にしようということを伝えていってほしいですね。

